

手術受け「女性に戻れた」

体は男の子でも、心は女の子。つい出てしまう女の子のしぐさや口ぶりに、同級生から「オトコオンナ」とからかわれた。

上伊那郡辰野町で9日、LGBT(性的少数者)への理解を深めようと開かれたライブ。ゲストとしてステージに上がった長岡春奈さん(56)は「松本市は、幼いころの体験を語った。聞き手と同じ性同一性障害の西沢芽衣さん(26)辰野町が「何十年も我慢したんですね」と驚く。長岡さんは穏やかな表情で答えた。「そういう時代だったから、仕方なかったもの」

50代半ばの長岡さんが思春期を過ごした1970年代、「性同一性障害なんて言葉はなかった」。男は男らしくーそんな教育が当たり前の時代。3年半前に手術を受け、戸籍の性別を女性に変えるまでには長い道のりがあった。

保育園に通っている時、既に性別に違和感があった。思春期になって、薬丸をベンチでつぶそうとしたが、あまりの痛さに断念。

LGBT 私らしく

信州で暮らして

3

松本の長岡さん いじめ・自殺未遂…半世紀苦悩

中学2年生の時、男生生徒たちから執拗ないじめを受けた。女子の制服を着るように言われ、拒むとたたかれる。しぶしぶ着ると隣のクラスに連れられ、いじめの体操を着るよう強要された。もう耐えられない」と手術を切ったが、これも痛くて途中でやめた。「死ぬこともできない自分があります嫌になつた」

高校を卒業して、情報機器メーカーに就職した。営業マンとして、東京や中国の北京、香港で販路開拓や人材育成に奮闘。部長職も務め、「仕事そのものは楽しかった」。

男物のスーツを着て、「男の付き合い」でナイトクラブなどで接待をするのは「つらかった」。帰宅後や休日はプラスやスカートに着替えて女性になり、街へ出て買い物をするのも。そうして心のバランスを保つ。

「ずっと自分だけが変だと思



つていた」長岡さんが、自身も性同一性障害だと気づくのは2004年。当事者が一定の条件を満たせば戸籍の性別を変更できる法律の施行を知ったときだった。

「性別を変える手術を受けたんだ」。11年のある日、長岡さんは家での食事の時、意を決して母のま志奈さん(79)に切り出した。「幼いころから、ずっと自分を女だと思ってきた。それが原因でつらい思いをしてきた」

病気がちの夫に代わり家計を支え、数年前に夫をみとつたよ

LGBTをテーマにしたライブに出演し、半生を語る長岡春奈さん＝9日、上伊那郡辰野町

志奈さん。長岡さんの苦悩には全く気づいていなかった。が、思いの深さを知り、その場で言った「あなたが男でも女でも私の子どもにも変わりはしないよ」

翌年、6時間半にわたる手術が成功。麻酔から覚めて、長岡さんは思った。「やっと女性に戻れた」

その後、当事者の支援に力を入れたという思いから13年に退



自宅でピアノを弾く長岡さん。母のよ志奈さんが見守る＝松本市

LGBTであることを親に打ち明けられたか。当事者の悩みは深い。母を悲しませたくないという思いから、長岡さんが告白したのは50代に入ってから。20代の西沢さんは、18歳で両親に伝えた。それから8年、今も母親と葛藤を繰り返している。

〈次回は2月1日に掲載〉

ご意見や体験をお寄せください
この連載への意見や感想、ご自身の体験をお寄せください。宛先は〒380-8546 長野市南県町657 信濃毎日新聞社文化部「LGBT 私らしく」係。ファクス026・236・3194、メール kurashi@shinmai.co.jp